

農薬は使用方法・使用回数をしっかり守って、 安全・安心な「なんかん米」を作りましょう！

令和5年3月
JAえちご中越
なんかん地区

- 容器等のラベルをよく読み、使用者自身の安全にも十分注意してマスク、帽子等を必ず着用のうえ、既定量の確実散布を行ってください。
- 住宅等の隣近辺への公害に注意し、飛散や散布時期を考慮するとともに、農作物への薬害防止に努めてください。
- 薬剤残液は、河川、かんがい水路、湖沼、池等に絶対流入しないよう留意してください。(タフロックも同様)
- 栽培記録カードは、作業した日に記入するように努めてください。

☆薬剤名横の()内の数字は県特栽農産物認証における節減対象化学成分数であり、()内の数字をカウントします。網掛けしてある薬剤はこだわり米指定資材です。

コシヒカリBLの種子は発芽揃いをよくするため浸種水温を12℃、積算温度120℃をめやすとして浸種を行いましょう。こしいぶきは通常の浸種水温10~15℃、

積算温度100℃をめやすに行いましょう。

「タフロック」(0)を使用した種子消毒

【適用病害】いもち病、ばか苗病、もみ枯細菌病、苗立枯細菌病、苗立枯病(トリコテラム菌・フジリム菌・リゾーブス菌)、褐条病※ ※褐条病は催芽時処理のみ登録有り
○温湯消毒との体系処理により、安定した防除効果が期待できます。

浸種	<ul style="list-style-type: none"> 雑菌の繁殖を抑えるため、期間中は2、3日に1回水換えを行う。 浸種水温は10~15℃に保つ。浸種開始時の10℃以下の低水温は発芽揃いが悪くなる。 <p>催芽前処理 ○蒸気催芽の場合は、催芽前処理としましょう。 浸種最後の水換え後の水に200倍希釈する ⇒ 十分に攪拌後、種粒を投入してよく揺する ⇒ 24~48時間浸漬する ⇒ 液を攪拌せず、種粒をゆっくり取り出す ⇒ 催芽</p>	<p>使用上の注意点</p> <ul style="list-style-type: none"> 生菌微生物農薬なので化学農薬を使用した種粒と一緒に水漬けしない。 反復使用はしない。 薬液は放置せず、24時間以内に使用する。 処理は十分な水量で実施する。(粒との容量比1:1以上)。 <p>【処理用の液調整】 例1) 水20リットル : タフロック100g 例2) 水100リットル : タフロック500g</p>
催芽	<p>催芽時処理 催芽機内の水温調整をした水に200倍希釈する ⇒ 十分に攪拌後、種粒を投入してよく揺する ⇒ 24時間浸漬する ⇒ 液を攪拌せず、種粒をゆっくり取り出す</p> <ul style="list-style-type: none"> 催芽水温は30℃を厳守する。 ハトムネ催芽機の場合、循環停止後しばらく静置してから種粒を取り出す。 催芽後の粒の乾燥は陰干しとし、過度の乾燥は避け、速やかに播種する。 	
播種	<ul style="list-style-type: none"> ベンレート・ダコレート剤、ダコニール剤の使用はできない(菌が死滅するため)。 	
出芽	<ul style="list-style-type: none"> 無加温出芽の場合、温度条件が気象に左右されやすく障害を受けやすいため、管理に注意する。 プール育苗の場合の入水や、他の薬剤の使用は緑化期以降とする。 	

「テクリードC フロアブル」(1)を使用した種子消毒

【適用病害】いもち病、ごま葉枯病、ばか苗病、もみ枯細菌病、褐条病、苗立枯細菌病、苗立枯病(トリコテラム菌・リゾーブス菌)

消毒・風乾	<p>塗沫法 乾燥種粒1kgあたり原液5mlを加え、ポットミキサー等を利用して薬液が均一に付着するよう攪拌する</p> <ul style="list-style-type: none"> 塩水選などで水洗いした粒は十分乾かしてから行う。 <p>浸漬法 種粒容量1.2~1.5倍量の200倍液を作る ⇒ 種粒を投入し24時間浸漬する</p> <ul style="list-style-type: none"> 消毒効果の安定のため、消毒後は必ず風通しの良い日陰で風乾する。 薬液の温度は10℃以下の極端な低温にしない。 	<p>【200倍液の調整】※種粒1kgあたり 水2リットル : テクリードC フロアブル10ml</p>
浸種	<ul style="list-style-type: none"> 消毒効果を高めるため、前半4日間程は水を入れ換えない。その後は発芽・発根を良くするため、2、3日に1回水換えを行う。 浸種は、10~15℃で10日間:積算温度100℃が目安。 	
催芽	<ul style="list-style-type: none"> 耐性菌の出現を助長する恐れがあるため、ハトムネ催芽機を使用する場合カスミン液剤は加用しないこと。 	

育苗病害対策 ~ 苗立枯病(カビ類)・細菌性病害(褐条病・もみ枯細菌病)~

※農薬名の()内の数字は成分数

適用病害	薬剤名	使用量	使用方法	使用時期
苗立枯病 (リゾーブス菌)	ダコニール粉剤(1)	育苗箱 1箱当たり15~20g(使用土壤約5リットル)	育苗箱土壤に均一に混和する	播種前
	ダコニール1000(1)	1000~2000倍 1箱当たり1リットル(使用土壤約5リットル)	土壤灌注	播種時から緑化期 但し播種14日後まで
褐条病、苗立枯細菌病、幼苗腐敗症	カスミン粒剤(0)	育苗箱 覆土1リットル当たり15~20g	覆土に均一に混和する	覆土前
褐条病、苗立枯細菌病、幼苗腐敗症、いもち病(苗いもち)	カスミン液剤(0)	育苗箱 1箱当たり4~8倍希釈液50ml(使用土壤約5リットル)	播種した種粒の上から均一に散布する	覆土前

本田防除

※農薬名の()内の数字は成分数

病害虫の発生状況により、使用農薬、防除時期を変更する場合があります。時期ごとに配布される「売れる米づくり技術情報」をよくご覧下さい。

箱施用剤	対象品種	薬剤名	適用病害虫	使用時期・方法	散布量	使用回数
	コシヒカリBL	プリンススピノ粒剤6(1)	イネコロイムシ、イネミズヅラムシ、フタオビコヤガ、ニカメチュウ、イネツトムシ、ウンカ類、けゴ類	播種時(覆土前) ~移植当日	50g/箱	1回
コシヒカリBL (いもち病多発地区)	Dr.オリゼフェルテラ粒剤(2)		いもち病、イネコロイムシ、イネミズヅラムシ、フタオビコヤガ、ニカメチュウ、イネツトムシ、ツマグロコバダイ	緑化期~ 移植当日		
コシヒカリBL (カメムシ多発地区)	デジタルメガフレア箱粒剤(2)	カヌムシ類、ウンカ類、イネミズヅラムシ、イネコロイムシ、いもち病 【移植当日のみ】ツマグロコバダイ、ニカメチュウ、	移植前3日~ 移植当日	育苗箱の 上から均一に 散布する	使用土壤 約5リットル	1回
コシヒカリBL以外	エバーゴルフオルテ箱粒剤(3)	いもち病、紋枯病、白葉枯病、イネコロイムシ、イネミズヅラムシ、ウンカ類、ツマグロコバダイ	播種時(覆土前) ~移植当日			

※エバーゴルフオルテ箱粒剤

⇒薬害回避のため、播種後の使用を推奨

本田防除	対象品種	防除体系	薬剤名	適用病害虫	10aあたり散布量	使用時期・方法	使用回数	
	全品種 地上 防除	地上 防除	スタークル粒剤(1)	カヌムシ類、ウンカ類、ツマグロコバダイ、ニカメチュウ、イネコロイムシ	3kg	収穫7日 前まで	3回以内 散布	
			スタークル液剤10(1)	カヌムシ類、ウンカ類、ツマグロコバダイ	1000倍液60~150リットル			
			トップシンM粉剤DL(1)	いもち病	3~4kg	収穫14日 前まで		
			トップシンMゾル(1)	いもち病、稻こうじ病、墨黒穗病、紋枯病	1000倍液60~150リットル			
			バリダシン粉剤DL(0)	紋枯病、疑似紋枯症	3~4kg	収穫14日 前まで		
			バリダシン液剤5(0)	紋枯病、もみ枯細菌病、疑似紋枯症	1000倍液60~150リットル	5回以内		

※無人ヘリで本田防除を行う場合は地域により薬剤が異なります

農薬登録状況確認日 令和5年1月31日